閉会挨拶

長谷川：　入澤先生、報告者の先生方、コメンテーターの先生方、どうもありがとうございました。以上もちまして、プログラム全て終了いたしました。最後に木田知生、本学当センターの副センター長より皆様に閉会のご挨拶を申し上げます。木田先生、よろしくお願いいたします。

木田：　高いところから失礼いたします。1時から今まで4時間以上経過いたしました。積極的に参加していただいた方々には心から御礼申し上げます。また、今日4時間に亘りましてご報告、或いはパネリストとして現代仏教の諸相についてお話をいただきました先生方には心よりの感謝を申し上げたいと思います。とりわけ、驚くような素晴しい日本語で発表いただきましたシャキャ先生には、私からも心からの敬意を込めて感謝を申し上げたいと思います。ありがとうございました。（拍手）

ちょっと雑談のようなことから始めさせていただいて、簡単に本日の内容についてまとめさせていただきたいと思っております。

先達て、私は本学の東洋史の教員でございますが、東洋史の英語訳をどうしましょうかというようなご相談がございました。当初、Department Of Oriental History ということで素案が来ていたのですけれども、いや Oriental はまずいだろうということで、今後 Asian History ということで、その案をまとめていくということにいたしました。

本日もう皆様方はお気付きだと思いますけれども、本学の設立間もないセンターの名前も「アジア仏教文化研究センター」と、こういうようになっております。また、今日の大きな演題も「アジア仏教の現在」ということで、ご報告をいただいたわけでございます。私も中国史を専門としておりますので、それを若干交えましてお話を簡単にまとめさせていただくと、このアジアにつきましては、時計で言えば逆回りになりますが、我が日本が含まれる東アジアから始まりまして、北アジア、西アジア、南アジア、東南アジア、そして中央アジアというように巡っておるわけでございます。本日は、そのうち東アジアの韓国の状況についてお話をいただきました。中国はまだ今回でも発表の対象になっておりませんけれども、その分野も今後話題に上ってくるかと思います。

また、本日の演題は、そこに「現在Ⅰ」とございますように、現代を中心にしておりましたけれども、今日のお話にすでにございましたように、過去がどうであったかというのは非常に重要なポイントでございます。今後、時代、地域等につきまして、いろいろな研究展開ができるのではないかというふうに思っております。

更に、専門領域について申しますと、もちろん私の若干知るところの中国を中心としてお話をいたしますが、仏典というものがございます。これにつきましても、旧来、もう今から1世紀、いやいや1000年ほど前まではほとんど抄本という形で伝わって

おりました。その後、刊本の大蔵経を始めまして、大量の印刷物が普及して参るんですけれども、おそらく仏教の布教、普及につきましては、この印刷術というものが非常に大きな影響力を発揮したのではないかと思いますので、そのことも含めまして、今後議論が展開するやというふうに思っております。現にそのことを象徴するかのように、近年、中国大陸、或いは台湾では仏教関係の印刷物が非常に多く出回っております。また、ご承知かと思いますけれども、電子・デジタル関係の文献ですね。これが異常な速さで、また異常な量で今展開をしているところでございます。更に、私も近年驚いたことでございますけれども、そうしたものをMP3ですね、音でそれを紹介するようなものも非常に増えております。かつてない状況が今、いろいろな地域で起っているということを知るわけでございます。

今日、宗派についても若干のお話はございましたけれども、今後は様々な地域での教団、或いは寺院運営、或いは信仰の在り方等々、問題に取り上げるべき点はいろいろとあろうかと思います。先達ても、中国の留学から帰りました、私どもの学生の発表を聞きまして、ちょっと思うところがあったんでございますが。それは、中国福建省での宗教現象についての報告でありましたのですが、主たる要素は道教でございましたが、その中に仏教的要素が満更ないわけではないと。というわけで、そこから私の想像したことは、仏教を中核とする民間の宗教でありますとか、土俗信仰でありますとか、こういうものも視野に入れて、今後考えていかなければいけないということをつくづく思った次第でございます。

もうすでに今日お話に出ました、仏教と国家、或いは政治といったものに加えまして、仏教と地域社会と、これも重要なテーマになってくるかと思います。或いは中国世界で申しますと、居士仏教、或いはまた最近少し流行った言葉でございますが、人間仏教（じんかんぶっきょう）ですね。人間仏教と書くのですが、実は、読みは「じんかんぶっきょう」の方がよろしいかと思うのですが。それは若干、今日お話もありましたエンゲージド・ブッディズムと若干の関係は持っているかと思いますが、その発展状況については大いに異なるところがあろうかと思います。

このように、私どもが掲げております、「アジアの仏教文化」ということでは、まだまだいろいろやるべき問題点は多くございます。先ほど、最初にご案内がございましたように、本研究センターの目標は５年間続くことになっております。今日参加いただいた先生方に加えまして、お聴きいただきました皆様方にも、以後５年間に亘りまして、本研究の継続につきましてご支援を賜りたく、最後にお願いをして、この会を閉じさせていただきたいと思います。本日はどうもありがとうございました。

【文責】龍谷大学アジア仏教文化研究センター